

---

# 屋上仲間

上谷 護

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屋上仲間

### 【Nコード】

N4337C

### 【作者名】

上谷 護

### 【あらすじ】

現実に希望を無くし『何故、人間は生きているのか？』そんな答えの出ない疑問を抱いていた。

僕は何のために生きているんだろう？

そう考えながら布団に横たわっていた。

寝る前にいつもながら煙草を吸う。吸った後に頭が浮くような感覚を覚える。酸欠からくるものからだろうか？その浮遊感が僕の思考を別の世界へと誘う。

最近よく死後の世界について考える。人間は死んだ後どうなるのか？その真実は誰にもわからない。神話などでは魂となりまた新しい命に生まれ変わると言われる。本当にそうなるのだろうか？

わからない。わかるはずもない。ただ知りたい。死んだ後、どうなるか。何も残らない無なのか。それとも神話通りか。それ以外か。いずれにせよ死んでみないとわからない。

とりあえず死ぬ方法を考えよう。

僕はこの生きている世界に未練はない。毎日同じ事の繰り返し。周りのみんなはよく頑張って生きていられると思う。

人間は何のために存在し、生きているのか？

そんな質問を学校の先生に聞いた事があった。先生は「私たちは今の現状を後世に伝える義務があるのよ。それが私たち人間です。」そう答えた。確かに間違っではないと思う。でも僕が望む答えにはなっていない。納得がいかなかった。

そんな事を考えて、いつの間にか寝てしまっていた。目を開けると既に部屋には朝日が差し込み眩しかった。

時間を確認する。まだ登校する時間ではないが、学校に向かおう。別に学校なんて好きじゃない。どちらかという嫌いな方だ。集団生活なんてどうでもいい。このまま部屋で寝ておきたい。

しかし、そうしていても静かに居られる訳ではない。親がとやかく五月蠅いのだ。進学に響くとか何とかを頭ごなしに言ってくる。確

かに間違っではない。事実ではあるのだ。ただ、生きる事がどうでもいい僕にとっては説教がただの雑音でしかない。ここ一週間、体調不良とか何とか言っつてずる休みをした。そろそろ説教も免れないだろう。そんなことを延々に聞かされるなら学校に行ってる方がましだ。

死ぬ方法なんて授業中でも考えれることだ。

僕は気持ちを切り替え、準備を整えた。

誰も居ない教室に入る。ここまで早く来たのは初めてだ。今日は休みと錯覚しそうなくらい静かで、やはりいつも同じ景色の教室。何も変わらない。少しは変わった事でも起きてくれないかと思う。そのほうがつまらない毎日よりも刺激があつていい。授業が始まるまで待っているのはさすがに辛い。

僕は何も入っていない鞆を置き、とりあえず教室から出た。

お気に入りである立入禁止の屋上に向かう途中、呼び止められた。

『おつ、柏君じゃないか！こんな朝早くから登校とは、さすがは生徒会長だ！まさに生徒の鏡！』

声をかけてきたのは、うざい進路指導の先生。ほとんど生徒に嫌われてるとも知らないで、よく先生をやっつけていられると思う。

『おはようございます。今日少し早く目が覚めたので、学校で勉強

しようかと思ひまして。』

そんなよく出来た嘘がすらすらと出てくる自分が怖い。今からどうすれば簡単に死ぬるか考えに行きます、と言ったらこいつはどんな顔をするだろうか？青ざめてぶっ倒れるかも知れない。でもそれは実行には移さない。とりあえず今はこの偽善者が気に入っているから。

『そうか！柏君ならあの有名進学校も余裕で合格出来そうだ。期待しているよ。』

『はい、ありがとうございます。』

進学なんてするつもりは無い。これからの事に興味等ない。興味あるのは人間の最期だ。

奴はそれだけを言い終えると職員室の方向へ消えていった。

僕は造り笑顔をしたまま屋上へ向かった。

屋上への扉には安っぽい南京錠が掛かっている。でも僕はそれを無視する。自分で作った合鍵があるからだ。

何故そんな事ができるのかと言うと、小学校の頃、夏休みの自由研究で鍵の仕組みを調べた。僕は身近にある南京錠を開ける事から始めた。開ける事は意外にも簡単で、小学生の僕でも簡単に出来るものだった。その開けた時の針金を観察している内に、簡易な合鍵を作れるようにもなった。そして今ではそれが役に立っているのだ。本当に興味とは怖いものだと思った。

扉を開けるとじわりと湿った風が吹き込む。空は厚い雲に覆われねずみ色で埋まっていた。

まだ本格的な夏になっていないのにも関わらず暑い。ただ立って居るだけで汗が出る。気持ちの悪い季節だ。

しばらく風を浴びていたが、居心地の悪さに嫌気がさし教室に帰る事にした。

なんだかんだしている内にもう授業が始まる前だった。

クラスの友達から話し掛けられるが、乗り気じゃない僕は受け流した。友達相手に偽善者を演じるのは疲れる。

授業が始まる。なんてレベルの低い事を行っているんだろう。三年ぐらい前やった記憶がある。

僕は塾に行っている。そこでやった問題だ。今更そんな授業受ける気にまならない。

ノートの隅っこに今思い付く死因を書き並べていた。もし死ぬなら何が良いだろうか？簡単で尚且つ自分の条件に合うものがない。

暫く目を閉じ、考えに更ける。  
そして閃く。

転落死、これがいい。

いつも寝る前に感じてる浮遊感と同じような感覚が得られるかも知れない。

夢へトリップする直前の感覚。

とても軟らかく甘い無意識下。

そして、そのあとに待っているのは死後の世界。

理想的な死に方。想像するだけで身震いがした。

鐘がなり授業が終わる。それと共に騒がしくなる教室。これから、この人生に終止符を付けようとしている自身が、まるで全てを超越

した存在であるかのように感じてしまう。こんな惨めな教室、人間ともおさらばだ。

僕は教室の空席を見つめる。

最後にお前だけには会っておきたかったな。僕と唯一気が合い、同じ思考をしている、本当の友呼べる存在。『月島 千絵』

僕は屋上に向かった。彼女と初めて会ったのもこの場所だった。僕は最初、立入禁止の場所に人が居ることに驚いた。

長い艶のある黒髪が夕暮れの空を景色に靡く。彼女の後ろ姿はどこか魅力的で僕は見とれていた。

『ここは立入禁止だよ？』

僕は尋ねた。

『貴方も入ってるじゃない。』

振り返らず言う彼女。

『貴方と喋るのは初めてね。生徒会長さん。』

『どうして僕だとわかったんだい？』

『ここを開けてくれたの貴方じゃない。それによくここに來てる。』

彼女の顔がこちらを向く。端正な顔立ち。きめ細やかな肌が夕日に照らされとても綺麗だった。

『ねえ、死んだ後の世界、あると思う？』

突然だった。哲学的な質問を彼女は僕に問い掛けた。

その答えはわかるはずも無かった。何故ならその時僕も疑問に思っていた矢先だからだ。

その彼女の一言から僕たち二人は仲間意識を持った。同じ疑問を持った人として。

それから、毎日の様にこの屋上で語り合った。色んな話をした。二人は今までの人生の境遇が似ていた。だから何でも共感できた。僕はその時間が楽しかった。それまで感じた事のない幸せを実感することができた。

しかし、その幸せも長くは続か無かった。

彼女は重い病気にかかっていた。その頃には既に末期でどうしようもない状態だったらしい。

そのことを彼女には僕には教えてはくれなかった。

気が付けば、彼女はもう僕の隣には居なかった。

一人で僕たちの答えを探しにいつてしまっていた。

彼女は答えを見つけれただろうか？

僕も今それを確認しに行くから待っていて欲しい。そしてまた語ろう。新しい話題で。

フェンスを乗り越え屋上の淵に立つ。そこから見える景色はいつもとは違い、凄く美しく感じた。まるであの時の彼女のよう。

答えがすぐ目の前にある。もうじき答えがわかるのだ。

さあ、もう一度語ろうか。千絵。

僕が脚に歩けと命令する直前、鼓膜に響く大きな声が聞こえた。

『待ってええ!!!』

びくと身体が反応し、何故か脚が鉛のように動かなくなってしまった。

振り返ると、そこには息を切らした真美がいた。

『どうして、どうして止めるんだよ?』

言うてから気付いた。自殺しようとしている人を止めない理由はない。ましてや幼なじみだ。

『あなたは、まだ、死んじゃいけないの……』

『……どうして?』

僕はもうこの世界に未練なんて無い。早く千絵に会いたいんだ。死ぬのにそれ以上の理由なんていらぬ。

『彼女は、千絵は、貴方に生きてほしいと願っているから。』

真美はそう言いながら、手に持っている封筒を僕に見せ付けた。

『千絵からの手紙。一週間前、貴方の机の中にあつたの……』

僕は真美のもとへと戻った。千絵からの手紙があるなんて、とても信じられなかった。しかし、心のどこかで希望していたのは事実だった。

封筒を開けると真っ白の紙が三つ折りが入っていた。

「貴方がこれを読んでいる時には私はもういないでしょう。

まず、礼を言います。ありがとうございます。私の短い人生を楽しませてくれて。

でも、貴方に会って後悔しています。貴方は私に生きたいと思わせてしまった。もう残り少ないことを知りながらも、夢を抱いてしまった。死ぬのが怖くなってしまった。私はこれを書きながら泣いています。

でも、貴方と会えてよかったです。

私は先に答えを見にいきます。でも、貴方は私の後を決して追わないで下さい。人は皆、いずれ答えに辿り着ける。だから、貴方は私の夢を実現してください。私の分まで生きて下さい。

私はいつまでも待っています。

屋上仲間 月島千絵」

胸が熱くなった。涙が止まらなかった。

僕はなんて罪な事をしてしまったんだ。僕は彼女を苦しめていたんだ。

それなのに、現実逃避しようと思死め決断をするなんて。自分の愚かさを今自覚した。そうだ、彼女の分まで生きるんだ。それが僕の罪の償いなんだ。

泣いた。涙が僕の視界を奪った。でも、なぜかそれが心地よく、尊

く感じた。

『……真美、ありがとう。』

こんな僕を見捨てないでいてくれた。心から感謝した。

『ねえ、章。私も……私も』

「屋上仲間」になってもいいかな……」

『ああ、歓迎するよ。』

空からは太陽が顔を覗かせていた。

真美は僕を背にしてこう言った。

『私、何故人間が生きるのか、答え、見付けたよ。』

彼女の後ろ姿には見覚えがあった。

(後書き)

最後まで読んでくれてありがとうございます。本当はもう少し長くあったのですが、短編でまとめました。描写が足りず自己満足気味ですが、これから精進していきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4337c/>

---

屋上仲間

2010年10月19日11時01分発行